



城

第三十回 おしじょう 忍城

～水攻めに耐えた浮き城～

深草 祐一

今回ご紹介するのは、忍の浮き城。豊臣秀吉の天下統一の総仕上げとなった小田原征伐において（第9回小田原城参照）、北条方の諸城攻略戦の一つとして、石田三成を総大将とする軍勢が大規模な水攻めを行ったことで知られる城です。この戦いを忍城守備側の視点からドラマチックに描いた映画「のぼうの城」が秋に公開されたところであり、今が旬の城と言えるでしょう。

おし 忍城主・なりた 成田氏

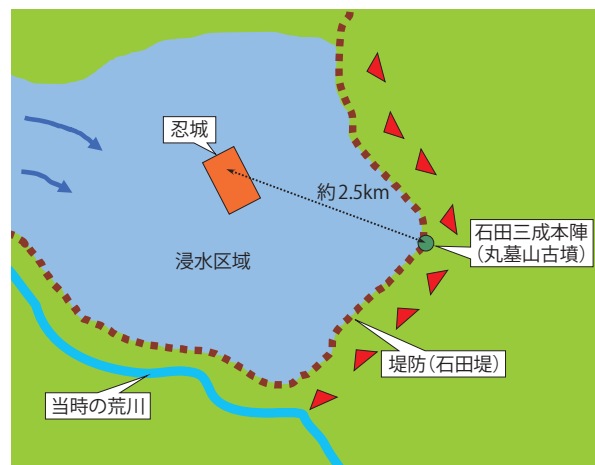
忍城は、関東管領上杉家が分裂抗争を繰り返していた時代に、成田氏がこれを奪って居城とし、大改修を施したと言われています。湖沼の広がる低湿地の中に点々と浮かぶ島のような微高地に曲輪を築き、それらを連結させた構造の城だったようで、難攻不落を誇っていました。扇谷上杉氏を支える有力者として周辺を支配してきた成田氏でしたが、扇谷上杉氏が北条氏に追われてからは、上杉の名跡を継いで関東へ出兵した上杉政虎（謙信）に一旦は従ったものの、後に関係が悪化し（真偽不明ながら、政虎が関東管領就任式を鎌倉で行った際、扇谷上杉氏の時代の特権により下馬しなかった成田長泰を、それと知らぬ政虎が打ち倒したという話あり。）、以後北条方となっていました。後に謙信の軍勢から包囲されますが、持ちこたえ、難攻不落を証明しています。

石田三成の水攻め

忍城攻めについて、これまで通説として知られていた様子は次のようなものです。

豊臣秀吉の軍勢が関東に来襲すると、当主の成田氏長は、主だった兵を引き連れて小田原城守備に加わったため、忍城に残されていたのは老人や女子供がほとんどでした。そこに、石田三成を総大将とする2万余の軍勢が押し寄せます。これまで大きな武功の無かった石田三成は、主君秀吉

に倣って低湿地にある忍城を水攻めにしようと思立ち、備中高松城攻めの時の数倍にも及ぶ長大な堤を築いて荒川の水を引き込み、城を水没させようとします。しかし、思うように雨が降らず、降ったかと思えば突貫工事で築いた堤が決壊して、逆に石田方の兵が溺れ死ぬといった有様で、まったく効果が上がりません。秀吉が状況を見物に来るといふ知らせに焦った三成は何とか攻め落とそうとしますが、守備方では女性ながら武術に優れた甲斐姫が前線に立って活躍するなど、戦上手の真田昌幸の手勢も含め、寄せ手はことごとく撃退されてしまいます。そうしているうちに、小田原城が降伏・開城。後に忍城も城主成田氏長の命により開城しますが、山中城、八王子城等の堅城がことごとく落とされた中であって、支城の中で小田原落城まで持ちこたえた唯一の城となったのです。そして、石田三成は戦下手との評価が決定的となり、これが後の関ヶ原の戦いで西軍からの離反が相次いだ原因の一つになったなどと言われています。ちなみに、甲斐姫の武勇は秀吉の目にとまり、後に側室の一人となって、おかげで成田家は辛うじて生き延びることとなりました。



忍城水攻め想像図



丸墓山古墳の上から忍城方面を望む

石田三成を弁護する新説

しかしながら、石田三成は関ヶ原の戦いで徳川家康と敵対した人物。江戸時代に書かれた書物では、どうしても三成を故意におとしめる内容となっていることが多いと言われています。そして、昨今、江戸時代以降すっかり定着していた三成の悪いイメージを見直す動きが多々見られ、この忍城の水攻めのエピソードもその一つです。そうした新説を念頭に置いて忍城攻めの経緯を想像してみると、話は次のようなものになります。

九州を平らげ、西日本をほぼ配下に収めた豊臣秀吉ですが、関東以東にはまだ威勢が十分届いていませんでした。関白の命に従わない北条氏を武力征伐することに決したものの、東国大名には伊達政宗など不穏な動きを見せる者が多く、ここで関白豊臣秀吉の武威を見せつけ、完全に屈服させる必要がありました。そして、小田原城とその支城の様子について報告を受けた秀吉は、低湿地に築かれた忍城に目を付けます。この地で、莫大な費用と労力を要するため単なる一大名ではなし得ない水攻めの戦法を大規模に展開して見せれば、いまだ反抗的な東国大名たちの心を折ることができるはず。秀吉はこの途方もない土木工事を完遂し得る家臣として、事務遂行能力に優れた石田三成を総大将に据え、名だたる武将の軍勢を配下に付けて忍城に向かわせました。しかし、現地に着いた三成は唸ります。「この城は、水攻めでは落ちない……。」とはいえ、秀吉の考える大局的な戦略を理解する三成は、工事の段取りを差配し、驚異的なスピードで長大な堤を築き上げました。ところが、思うように水嵩は増してこず、配下の兵たちは初めから水攻めありきで、いかにも士気が低く、強襲策もうまくいきません。それどころか、強襲によって敵の首級を挙げた浅野長政から秀吉に報告が行くと、「結構なことだが、

忍城は必ず水攻めとせよ。」との返事が届くという状況でした。他方、忍城の守備兵は意外に士気が高く、降伏の勧めにも全く応じる気配がありませんでした。そうしているうちに、小田原城を見下ろす石垣山一夜城の築城をはじめとする数々の心理攻撃が功を奏し、北条氏直が降伏。成田氏長の命により忍城は開城となったのでした。結局、忍城を落とせなかった三成ですが、共に忍城攻めに参加した佐竹義宣や真田昌幸らは、現場を見ない上司の命に苦しみながらも大局を理解し不可能とも思われる難事業を着実に行う三成の姿を間近で見っていました。後の関ヶ原の戦いにおいて両者は石田方に付き、佐竹義宣は上杉と連携して徳川家康を奥州で迎え撃とうとし（第16回会津若松城

参照）、真田昌幸は上田城で徳川秀忠の軍勢を釘付けにする（第15回上田城参照）という働きをすることになります。

このような違いを見ると、歴史というものがいかに見る者によって違ったものになるかがよく分かり、興味深いものです。

現在の忍城

忍城は、江戸時代には徳川譜代の大名が入る地となり、明治に至りました。現在、忍城跡は、埼玉県行田市の水城公園として整備されています。広大な壕の一部が池として残され、本丸跡の郷土博物館の一角に御三階櫓が復元されています（ただし、位置は本来と異なる。）。

また、石田三成が本陣を置いたのは、埼玉の語源となった埼玉古墳群の一つ、丸墓山古墳の上だと伝わります。そこへ通じる道は当時の堤の一部だと言われており、その上から忍城跡を遠望すれば、水攻めがいかに大規模に行われたのかを感じることができます。



今に残る石田堤の跡（石田堤史跡公園）